

スポーツ選手の知的能力と「生きる力」の関連性について

矢部 恭平 粟木 一博

キーワード：スポーツの知的能力 生きる力 タレント発掘育成事業
グローバルスポーツ教育プログラム

The relevance of “life skills” and “intellectual ability” of the athlete

Kyohei Yabe Kazuhiro Awaki

Abstract

A new educational guideline, which is included a big proposition that to foster "Life skills" has been revised in recent years. This is one of the most important ability in order to survive the modern society. On the other hand, it can be mention as the ability to be cultivated by sports; such as concentration power and mental strength of "heart", the sports-related of "technical capabilities", and the high level's essential part of "physical fitness". However, it is able to sense the high ability of the problem solving and the communication skills that are not included in above three categories from behavior of the top athletes. The major purpose of this research is revealing questions, which about what is the "Intellectual ability of sports", and what will they relate with the "Life skills".

I. 本研究の背景・目的

スポーツ選手に対して抱く人格像に「明るくハキハキとしている」、「積極的で行動力がある」、「困難にも挫けない」といったスポーツマン的性格と呼ばれるものがある。多くの人は、スポーツをする者としなない者との間には明らかな人格の違いがある印象を持っている。しかし昨今スポーツ選手による不祥事（モラル欠如）が多発している。その原因の一つとして、部活動などの学生スポーツでの過剰な勝利至上主義が根底にあることが挙げられる。反則行為や、フェアプレイを軽視したプレーが行われたとしても最終的に勝利という絶対的な目的を達成できれば、選手の人格は重視されることはない。鳥羽（2011）は本来スポーツには「生きる力」や「人間の力」を育むといった全人的な教育機能が備わっていると述べている。近代スポーツの源であるイギリスのパブリックスクールでは、スポーツは人格を陶冶するための重要な教育手段としてその目的があり、身体を鍛えるためだけに行われたものではなかった。しかし、昨今のスポーツ選手による不祥事の頻発を見ると、スポーツは、その教育機能を発揮しているとは言い難い。そこで、今スポーツの教育的価値を見直す必要がある。

21世紀初頭に入りさまざまな能力が教育の議論の俎上にのせられるようになった。例えば、「生きる力」（文部科学省）、「リテラシー」（OECD）、「キー・コンピテンシー」（OECD）、「人間力」（内閣府）、「就職基礎能力」（厚生労働省）、「社会人基礎力」（経済産業省）、「学士力」（経済産業省）、「エンプロイヤビリティ（雇用されうる能力）」（日本経営者団体連盟）などを挙げることができる。こうした多様な用語で表される諸概念を、松下（2010）は、「新しい能力」と呼んでいる。

「文部科学省」では2005年の中央教育審

議会答申において「知識基盤社会」の到来を述べている。その中で21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す時代と定義されている。「生きる力」とは、1996年に文部省（現在の文部科学省）の中央教育審議会（中教審）が「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」という諮問に対する第1次答申の中で掲げられた教育目標であり、児童・生徒が「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」、「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力」を身につけることを目指すものである。このように、「生きる力」は知・徳・体のバランスの取れた全人的な力であるといえる。それはいかなる場面でも、発揮でき、活かされるものでなくてはならない。これらの能力は現代社会を生き抜く上で非常に重要な能力のひとつであるといえる。

一方で、スポーツによって培われる能力として精神的な競技能力、高い水準の根幹をなす体力、スポーツ種目に関連する技術力などを挙げるができる。しかしトップアスリートの言動からはこれらの範疇には含まれないコミュニケーション能力や問題解決能力の高さを読み取ることができる。これらのいわゆる「スポーツ競技者の知的能力」とはどのようなもので、それらは「生きる力」とどのような関連性を持つのであろうか。本研究では、スポーツの知的能力の構造を明らかにするとともに、その「スポーツ競技者の知的能力」と「生きる力」との関連性を明らかにし、「スポーツを通じた教育（スポーツの知的能力の開発）」の「生きる力」育成への寄与について検討を加える。

Ⅱ. 用語の解説

スポーツの知的能力を育成する取り組みとして仙台大学のスポーツ健康科学研究実践機構を中心として開発された、グローバルスポーツ教育プログラム(Global Sport Education Program、以下GSE Pと略記)と呼ばれる活動がある。GSE Pは、様々なスポーツやゲーム、グループワークなどの体験活動を通して、スポーツ場面だけでなく、日常生活を送る上でも重要となる知的能力の育成を目指している。GSE Pでは大きく分けて3つの知的能力の育成を目指している。1つ目が話す、見る、聞くなど人と人とのコミュニケーションを円滑にするための「ヒューマンスキル」。2つ目が問題を客観的に把握し解決に至る道筋を論理的に表現する「コンセプチュアルスキル」。3つ目が自分の感情や環境を整理したり自分に必要な情報を選択し有効活用したりするための「マネジメントスキル」である。GSE Pは、単なる講義形式で知識や情報を提供するばかりではなく、実際に行動することによって意思、意欲、態度、関心、思考といった全体的な働きかけを行なうことによって、ジュニア期にあるアスリートの総合的な発展を企図している。

Ⅲ. 研究方法・研究内容

1. 調査1 大学生に対する調査

S大学に通う大学生361名を対象とし、質問紙Aと質問紙Cの2種類の質問紙とともに自作の個人プロフィール調査を実施した。質問紙Aは「スポーツの知的能力に関する質問紙(競技者版)」と命名をし、知的能力の有無を測ることができる。質問紙Cは石井・島本(2006)によって開発された日常生活スキル尺度であり、この尺度は被験者の生きる力の有無を測ることができる。

この2つの質問紙を用いて知的能力の特徴に関する分析と検討、知的能力と生きる

力の関連性を明らかにすることを目的として調査をおこなった。

2. 調査2 トップコーチに対する調査

日本体育学会主催の指導者講習会に参加した、トップコーチ124名を対象とし、質問紙Bと質問紙C2種類の質問紙とともに自作の個人プロフィール調査を実施した。

質問紙Bは「スポーツの知的能力に関する質問紙(指導者版)」と命名をし、知的能力の有無を測ることができる。この2つの質問紙を用いて指導者の知的能力の特徴に関する分析と検討、知的能力と生きる力の関連性を明らかにすることを目的として調査をおこなった。

3. 調査3 山形県在住の小学生に対する調査

山形県スポーツタレント発掘育成事業YAMAGATAドリームキッズに所属しており、仙台大学が実施する知的能力開発プログラム(GSE P)を定期的に受けているキッズアスリート51名とGSE P未受講者である山形市立T小学校に通う5、6年生229名を対象とし、質問紙Dと質問紙C2種類の質問紙とともに自作の個人プロフィール調査を実施した。質問紙Dは「スポーツの知的能力に関する質問紙(小学生版)」と命名をし、知的能力の有無を測ることができる。この2つの質問紙を用いてそれぞれの知的能力を比較し、GSE Pが知的能力を育成するのに有効に働くのかということ明らかにすることを目的として調査を行った。

Ⅳ. 研究結果

1. 調査1 大学生に対する調査

質問紙Aの43項目の質問項目に対して探索的因子分析を試みた。

主因子法を用いて固有値1以上の因子は

5 個抽出されスクリープロットを見ても 5 因子解が示唆された。

そして、質問紙 C を構成する 8 因子との間で相関係数を求め、以下の結果が出た。

表 1 因子相関行列

測定変数	(質問紙A) スポーツの知的能力に関する質問紙					
	自己管理能力	自己客観視	コミュニケーション力	向上心	発想力	
日常生活スキル尺度 (質問紙C)	親和性	.328**	.313**	.442**	.418**	.299**
	リーダーシップ	.503**	.360**	.672**	.467**	.420**
	計画性	.551**	.475**	.463**	.538**	.419**
	感受性	.277**	.363**	.398**	.400**	.383**
	情報要約力	.530**	.477**	.537**	.515**	.511**
	自尊心	.451**	.366**	.452**	.402**	.396**
	前向きな思考	.323**	.244**	.269**	.315**	.281**
	対人マナー	.183**	.338**	.306**	.278**	.247**

*p<.05; **p<.01; ***p<.001

本調査の結果から、知的能力の「自己管理能力」「コミュニケーション力」「向上心」の得点が高いものは、全体的に生きる力を構成する因子との間に正の相関があるという特徴が認められた。

これは、スポーツで培われた知的能力が生きる力に正の影響を与えていることになる。このことから知的能力を構成する因子と生きる力を構成する因子に強い関連性があることがわかる。

2. 調査2 トップコーチに対する調査

質問紙 B の 53 項目の質問項目に対して探索的因子分析を試みた。

主因子法を用いて固有値 1 以上の因子は 5 個抽出され、またスクリープロットをみると 5 因子解も示唆された。

質問紙 C を構成する 8 因子との間で相関係数を求め、以下の結果が出た。

表 2 因子相関行列

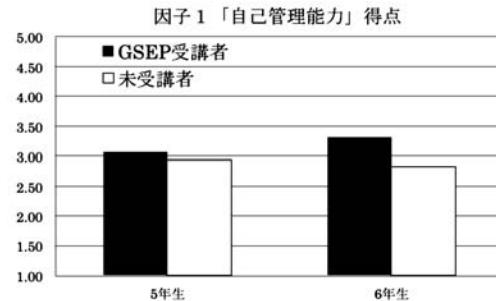
測定変数	(質問紙B) スポーツの知的能力に関する質問紙					
	対人関係能力	コミュニケーション力	自己管理能力	課題発見・問題解決能力	適応能力	
日常生活スキル尺度 (質問紙C)	親和性	.543**	.455**	.297**	.311**	.227**
	リーダーシップ	.629**	.692**	.513**	.405**	.356**
	計画性	.483**	.375**	.537**	.429**	.233**
	感受性	.577**	.519**	.408**	.404**	.380**
	情報要約力	.573**	.588**	.545**	.581**	.483**
	自尊心	.412**	.444**	.353**	.283**	.181**
	前向きな思考	.408**	.356**	.433**	.357**	.163**
	対人マナー	.552**	.352**	.438**	.515**	.242**

*p<.05; **p<.01; ***p<.001

本調査の結果から、トップコーチは知的能力の「対人関係能力」と「自己管理能力」、が高いものは、全体的に生きる力を構成する因子との間に正の相関があるという特徴が認められた。これは、スポーツで培われた「対人関係能力」「自己管理能力」が生きる力に正の影響を与えていることになる。このことから知的能力を構成する因子と生きる力を構成する因子に強い関連性があることがわかる。

3. 調査3

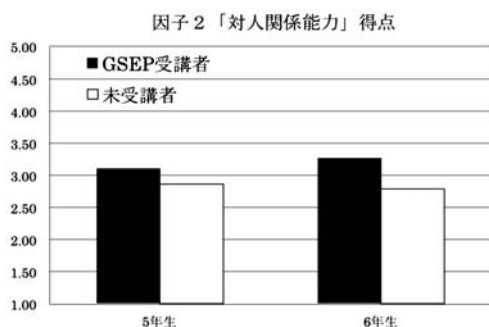
質問紙 D の 19 項目の質問項目に対して探索的因子分析を試みた結果、因子は 3 個抽出された。次に、T 山小学校の小学 5、6 年生、YAMAGATA ドリームキッズに所属する小学 5、6 年生の 4 つのグループに分類し、知的能力の 3 因子、でそれぞれ因子得点の平均を表した。



グラフ 1 因子平均得点比較

知的能力の「自己管理能力」の因子平均得点は、GSEP 受講者であるドリームキッズの 5 年生の平均得点が 3.06 であり 6 年生が 3.31 であった。

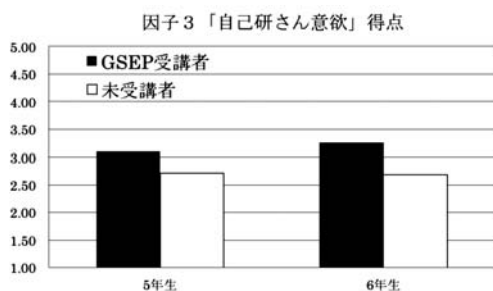
一方で GSEP 未受講者である T 小学校の小学 5 年生の平均因子得点が 2.94 であり、小学 6 年生の平均因子得点が 2.83 であった。



グラフ2 因子平均得点比較

知的能力の「対人関係能力」の因子平均得点は、GSEP受講者であるドリームキッズの5年生の平均得点が3.10であり6年生が3.26であった。

一方でGSEP未受講者であるT小学校の小学5年生の平均因子得点が2.86であり、小学6年生の平均因子得点が2.78であった。



グラフ3 因子平均得点比較

知的能力の「自己研さん意欲」の因子平均得点は、GSEP受講者であるドリームキッズの5年生の平均得点が3.10であり6年生が3.26であった。

一方でGSEP未受講者であるT小学校の小学5年生の平均因子得点が2.71であり、小学6年生の平均因子得点が2.69であった。

次に、質問紙Cを構成する8因子との間で相関係数を求めた。

表3 ドリームキッズ因子相関行列

測定変数	(質問紙D) スポーツの知的能力に関する質問紙		
	自己管理能力	対人関係能力	自己研さん意欲
	日常生 活スキル 尺度 (質問紙C)		
親和性	.434**	.655**	.251
リーダーシップ	.580**	.362**	.168
計画性	.513**	.267	.674**
感受性	.377**	.376**	.319*
情報要約力	.721**	.279*	.453**
自尊心	.329*	.236	.161
前向きな思考	.327*	.539**	.215
対人マナー	.363**	.028	.493**

*p<.05; **p<.01; ***p<.001

表4 T小学校因子相関行列

測定変数	(質問紙D) スポーツの知的能力に関する質問紙		
	自己管理能力	対人関係能力	自己研さん意欲
	日常生 活スキル 尺度 (質問紙C)		
親和性	.563**	.524**	.344**
リーダーシップ	.754**	.591**	.348**
計画性	.658**	.503**	.737**
感受性	.660**	.551**	.528**
情報要約力	.745**	.579**	.459**
自尊心	.565**	.519**	.374**
前向きな思考	.414**	.499**	.270**
対人マナー	.555**	.485**	.558**

*p<.05; **p<.01; ***p<.001

学年別と所属別の2要因の分散分析を行った結果、「自己管理能力」に限り交互作用で主効果 (F = 3.58, df = 1/276, p < 0.001) が見られた。

表5 分散分析表

変動因	自由度	偏差平方和	不偏分散	分散比	P値	判定
全体	279	99.21				
所属別	1	3.51	3.51	10.28	0.00	[**]
学年別	1	0.30	0.30	0.89	0.35	[]
交互作用	1	1.22	1.22	3.58	0.05	[*]
誤差	276	94.17	0.34			

*:P<.05, **:P<.001

このことからYAMAGATAドリームキッズがGSEPのプログラムを通して、より効率的且つ効果的に「自己管理能力」を育成していることを示している。

知的能力に関する質問紙で大学生、トップコーチでそれぞれ抽出された知的能力の5因子と生きる力の8因子で多くの項目において正の相関が見受けられた。これは、知的能力を育成することで、同時に生きる力の育成が可能であるということを示してい

る。また調査3の結果からは「自己管理能力」にしか相互作用は現れなかったが、GSE Pのプログラムによってより効率的に「知的能力」、「生きる力」の育成を可能にすることが考えられる。

IV. 今後の展望

今回の研究結果からスポーツの知的能力と文部科学省が提唱する「生きる力」には非常に強い関連性があることが証明された。スポーツの知的能力を育成することができるGSE Pを今後、学校の授業などに取り入れることで、学校の教育目標を達成するために有効に働いたり、効果的に子どもたちの「生きる力」を育成することができる可能であるということが考えられる。

参考文献

- 1) 鳥羽賢二 (2011), スポーツ選手のライフスキル教育の必要性 Bulletin of Biwako Seikei Sport College (8), 179-180, 2011-03-15
- 2) 松下佳代 (2010). 「〈新しい能力〉概念と教育—その背景と系譜」松下編『〈新しい能力〉は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房.
- 3) 河野一郎 監修, 勝田隆 著 (2002), 知的コーチングのすすめ: 大修館書店
- 4) 文部科学省 (2010), スポーツ基本法, 前文
- 5) 文部科学省 (2008), 中学校学習指導要領解説, 保健体育編 P15
- 6) 日本体育協会 (2001), 21世紀の国民スポーツ進行方策
- 7) 伊藤豊彦 (2004) スポーツへの動機付け, 最新スポーツ心理学-その軌跡と展望, 日本スポーツ心理学会編, 大修館書店, 33-44
- 8) 高橋英次・川上吉昭 (1963) 中学校におけるクラブ活動としてのスポーツの生徒の基礎体力に及ぼす影響, 体力科学, 12, 166-171
- 9) 西川濱八・稲富稔 (1976) 職場体育の普及とその効果について, 体力科学, 26, 73
- 10) 徳永幹雄 (2005) 運動・スポーツで健康は高められるか, 教養としてのスポーツ心理学, 徳永幹雄編, 大修館書店, pp.117-1
- 11) 友添秀則 (2006) 大学スポーツという問題, 現代スポーツ評論 14, 友添秀則編, 創文企画, 6-15
- 12) WHO 川畑徹朗他監訳 (1997) WHO・ライフスキル教育プログラム, WHO編, 大修館書店.
- 13) J K Y B 研究会 (1996), 健康教育とライフスキル学習-論理と方法, 明治図書
- 14) 中込四郎 (1993), 危機と人格形成-スポーツ競技者の同一性軽形成-道和書院
- 15) 島本好平・石井源信 (2006) 大学生における日常生活スキル尺度の開発, 教育心理学研究, 54, 211-221
- 16) 上野耕平・中込四郎 (1998) 運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究, 体育学研究, 43, 33-42
- 17) 仙台大学スポーツ情報マスメディア研究所年次報告書 2010 (Vol. 3)